

Title	國民の日本史 飛鳥奈良時代, 西村眞次著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.1 (1924. 6) ,p.160(756)- 161(757)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240600-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

行くべきものなることを附言し置く。(恒松安夫)

國民の日本史 飛鳥奈良時代

西村眞次著 早稻田大學出版部發行

飛鳥奈良時代は、日本歴史に於いて最も重要な時代の一つである。即ち政治的に言つて日本が始めて對内的にも對外的にも強烈なる國家的意識に覺醒し、強固なる統一と旺盛なる活動となした時代であつた。たゞひ大陸に於ける根據地を喪失したとは言へ、對外關係がますます頻繁に、複雑に、全國家的になり行くとともに、國內に於いては地方の開拓の進捗につれて異種族との接觸がさかんになり、同時に従來の國家組織、社會制度の根源であつた氏族制度を破壊して中央集權の確立を期せんとする努力がなされた。また文化的に言つて日本は、さかんに外來文化を輸入同

化し、固有文化と融合して新たな綜合文明を創造したのである。社會制度改造の原理となつた法制的知識は、隋、唐にその淵源を發するのである。深遠なる哲理をもつて單純な原始的信仰に一大衝動を與へた佛教は、印度の所産である。いまなほ世界の文化史上に於ける一大驚異とされる當時の藝術——繪畫、彫刻、建築、音樂、舞踊をみよ、遠く支那、印度、ペルシヤ、アツシリヤ、ギンシヤ、エジプトにまでその系統をもとめられ、いくたの世界的要細を包含するのである。要するに當時の日本は、剛健なる政治

的體軀をもつて、清新潑瀾たる文化的呼吸を旺盛に營んだ時代であつて、封建制度を打破して近代的國家の形式をとり、西洋文明の影響をいちぢるしくうけた明治時代の姿と極めて類似する。従つて明治時代の空氣を親しく呼吸した吾々にとつては、この時代は深甚の興味を喚起することも、またその時代の複雑であるだけその時代史の構成の極めて困難なるを思はしめる。而してここに紹介する西村氏の「飛鳥奈良時代」は、實にこの複雑なる時代を取扱へるものである。

まづ著者は筆を原始状態より起して、佛教の起原とその發達、及び之れが日本に輸入された經路を明かにし、聖德太子を中心としてその時代相を叙し、氏族制度の弊害より大化の改新、並びにその改新の中心人物たる天智天皇を論じ、律令の制定と政府組織の系統化をのべて社會組織の改造を明かにし、ついで建築、繪畫、彫刻、科學等の精神文化の系統をたづね、さうして飛鳥文様をもつて時代藝術の象徴としてゐる。また奈良時代はその社會相から出發して、平安奠都、文化的行政、民衆生活、社會裏面の黑影を叙し、聖武天皇と光明皇后を中心として佛教國家の建設を説き、ついで奈良藝術の内包及び外延を論じて、音樂と舞踊をもつて當時の藝術の象徴となし、最後に時代末の墮落齟の章に於いて、宮中の腐敗、押勝及び道鏡の專横と野心、財政經濟上の危機等を論じてゐる。

時代が複雑にして、その文化現象が幾多の要素を含むが故に、その研究もおのづから廣汎に亘らざるを得ない。理解力廣き著者は各方面に於ける諸學者の研究をよく咀嚼し、それを綜合統一して自己の創見にみちびき、豊麗なる筆致をもつて絢爛なる當時の文化相を再現してゐる。たゞごく些細なことはあるが著者が第八章第五節自意識に富める文學のところ、現世の執着を説く場合（本書六六三頁）に引用された歌二首を大伴家持の作とされてゐるが、これは明かに思ひちがひではなからうか、この歌はそのすぐ後に引用されてゐる多くの歌とともに大伴旅人の讀酒歌十三首（萬葉集第三卷）中の一部である。しかしかかる誤謬は決して本書の價値に關係あるものではない。吾々は本書をもつて史學界の好著として推稱し、同時に著者の異常な努力に敬意を表するものである。

（松本芳夫）

The Life of the Ancient East, by James Baikie

New York, 1923. 8vo. XVI+464 pp.

最近世に於ける考古學的發掘と、古代文學の解讀とによつて史學の上に示された顯著なる進歩は、遂に西亞、埃及と多島海方面に於ける西人の所謂東邦古代史の書換を必要とするに至つた。忍耐強き不撓不屈なる人々の努力に俟つ考古學的踏査發掘事業の進展

は、著大なる新發見の度毎に、専門學者と一般世人の注意を間歇的に是等地方に集中せしめつゝあつたが、一昨年の埃及に於けるツタンカアメン王陵墓の好運なる發見は、ロンドンタイムスの報道と共に、又もや、考古學的埃及熱を昂め、之に對應して、一日も早くその經過を發表せんとする學者の熱心と競争もこの間に見られたのである。ツタンカアメンについては大英博物館のバツザも書いた。スミスも書いた。その發掘者なるターナーとメースの手によつても既にその第一卷は世に問はれた。古代東邦に關する舊書もこの年に夥多改訂せられ、新著も豊富に出でた。ケンブリッヂ古代史の第一卷の出版も偶然にもこの年に於てなされた。信頼し得る研究と著述とは、日を追つて續々出版せられるであらうが表題の本書も亦古代史に取つて多事なるこの年に出でたものである。

著者は發掘事業について一言したる後、埃及史の初をなす聖市アビドスに筆に起して、テル・エルナ、アマル、テーベの兩岸へと進み、凝視的となれるツタンカアメンに言及し、更に轉じて初期パピロニヤに於ける典型的市邦ラガツシエ、法源としてのハムラビ法典の發見、軍國主義のニネヴェを説き、傳説のトロイギリシヤのミケネ、マイブルに由緒深きゲザー等の記述を以て終つて居る。本書には古代東邦に於ける『近代發掘のロマンス』で世評を得たるものは悉く收録されてある。その權威は兎も角、近時發見の跡を總覽せんとするには至つて便利である。（間崎萬里）